

## Kikinashi

今天，我要和大家聊的话题是“聞きなし”。

所谓“聞きなし”，就是用人类的语言来形容鸟类等动物的叫声，给这些叫声赋予一些有趣的意义。就比如，杜鹃的叫声非常独特。

“特許、許可局! 特許、許可局! 特許、許可局!”

在日语里，杜鹃的叫声有好几种形容方法，其中一种就是替换成日语词汇“特許許可局”，翻译过来就是“专利审批办公室”的意思。

这种叫声还有一种形容方法，可以理解为：“天辺、翔けたか? 天辺、翔けたか? 天辺、翔けたか?”直译过来，意思就是：你飞到最高的地方了吗?

和“专利审批办公室”比起来，还是后一种带有飞翔之意的“你飞到最高的地方了吗?”更有鸟的感觉。

同样是杜鹃鸟的叫声，在中文里通常会被形容为：

“不如归去! 不如归去!”

“不如归去”是中文古文的说法，翻译成现代语就是：“回家才是最好的”。在古代，中国的旅人在旅途中听到杜鹃“不如归去! 不如归去!”的啼鸣声，自然而然便唤起了思乡之情。唐代诗人王维、李白、杜甫等都曾有感于杜鹃“不如归去”的叫声，写下了思念故乡的诗句。比如，李白有一首思乡的七言绝句是这样吟诵的：

蜀国曾闻子规鸟，宣城还见杜鹃花。

一叫一回肠一断，三春三月忆三巴。

就因为受到了中国文化的影响，在日本，“子规”也成了杜鹃鸟的别称。

中国关于杜鹃啼叫“不如归去”表达思乡之情的说法，到唐代时也传到了日本。所以，日本也有很多和歌和诗句将杜鹃叫声解释为“不如归去”。相比之下，“专利审批办公室”远远没有那么风雅，不过在俗人耳朵中，或许更容易理解一些。

除了杜鹃以外，莺的叫声也很好听。唐代诗人杜牧曾吟诵过“千里莺啼绿映红”这样的诗句，赞颂莺的叫声让春意更浓。

另外，诗人杜甫也曾这样吟诵道：

留连戏蝶时时舞，自在娇莺恰恰啼。

可见，中国的古文是用“恰恰”二字来形容莺的叫声的。而在日语中，我们会将其替换成“法華經”，也就是“法华经”。

“ホー、ホケキヨ。ホー、ホケキヨ。ホー、ホケキヨ。”

日本自古就有许多人信奉佛教，所以在形容鸟类的叫声时，也会使用许多与佛教相关的说法。比如，有一种鸟叫“红角鸮”，日本人将它的叫声形容为“仏法僧”，也就是佛教三宝“佛宝、法宝、僧宝”的“佛、法、僧”。

“ブッポーソー、ブッポーソー、ブッポーソー”

18世纪，日本江户时代有一部灵异小说集，名为《雨月物语》。里面有一篇关于鬼魂的故事，题为《佛法僧》。在这个故事里，红角鸮的叫声被形容为“ぶっぱん、ぶっぱん”，也就是“佛法，佛法”。这样的描写很好地烘托出了鬼魂出没的夜晚，山野荒寂的恐怖氛围。

另外，日本还经常能听到灰脸鵟鹰的叫声。

“キッス、ミー。キッス、ミー。キッス、ミー。”

日本人觉得这种叫声很像英语：“Kiss me!”也就是“亲吻我”的意思。很有趣吧?

像这样的例子在日本还有很多，就比如：云雀的叫声在日语里被形容为“利取る、利取る、日一分”，意思是“利息拿来，利息拿来，一天十分之一。”

灰胸竹鸡的叫声在日语里是：“ちよつと来い、ちよつと来い”，意思是“来这里，来这里”。

而家燕的叫声在日语里被形容为：“土食って、虫食って、口渋い。土食って、虫食って、口渋い。”意思是“我吃泥巴，用来筑巢。我吃虫子，补充营养。吃来吃去，嘴里好涩。”

在这些形容鸟类叫声的说法中，有的让人觉得“很有道理，确实挺像鸟说的”，也有的非常滑稽，叫人不由失笑，想问一句：“鸟怎么会说这种话?”

日本山林众多，绿植繁茂。山野和农村自然不用说，即便是在城市里也常常能听到野鸟的啼鸣。

如果大家有机会来日本游玩，不妨也竖起耳朵倾听一下鸟儿的歌唱吧。

《加藤老师来开讲!》是NHK日本国际传媒中文广播节目《波短情长》中的小栏目，特邀日本明治大学教授加藤彻深入浅出、诙谐幽默地讲解日本文化。您有没有想要了解的日本文化或习俗? 欢迎给本节目来信或留言!



## 聞きなし

今日は、鳥の声の「聞きなし」についてお話しします。「聞きなし(聞き做し)」とは、鳥などの動物の鳴き声を、人間の言葉に置き換えて解釈することを指します。例えばホトトギスの鳴き声は特徴的です。

「特許、許可局! 特許、許可局! 特許、許可局!」

日本語ではいろいろな置き換え方がありますが、「特許許可局」もその一つ。中国語に直訳すると“准許專利弁公室”です。ホトトギスの鳴き声について、さらに別の聞きなしもあります。

「天辺、翔けたか? 天辺、翔けたか? 天辺、翔けたか?」

「天辺、翔けたか?」は直訳すると「最高に高いところを飛翔したか?」です。「特許、許可局」に比べれば、空を飛ぶという意味の「天辺、翔けたか?」のほうが、ちょっと鳥らしいですね。

中国の聞きなしでは、ホトトギスの声は、こんな風になるようです。

“不如归去! 不如归去!”

“不如归去!”は“古文”で、現代中国語では「家に帰るのがいちばんいい」という意味になります。古来、中国の旅人は、旅先でホトトギスが“不如归去! 不如归去!”と鳴く声を聞くと、望郷の念に駆られました。

唐の詩人である王維や李白、杜甫らも、ホトトギスの“不如归去!”という鳴き声をふまえて、望郷の念を漢詩に詠んでいます。以下は李白が望郷の思いを詠んだ七言絶句です。

蜀国曾闻子规鸟, 宣城还见杜鹃花。一叫一回肠一断, 三春三月忆三巴。

“子規”もホトトギスの異名です。

ホトトギスは“不如归去!”と望郷の思いをさえぎっている、という中国の伝説は、唐の時代までには日本にも伝わっていました。日本の和歌や詩でも、ホトトギスの鳴き声を「不如归去」(帰去するにしかず)と聞きなした作品が、たくさんあります。

それに比べると「特許、許可局」は雅ではありませんが、俗人の耳にもわかりやすい。

ウグイスも、美しい鳴き声で有名です。唐の杜牧の漢詩には次のような部分があります。

千里莺啼绿映红

ウグイスの声は春の気分を盛り上げます。唐の杜甫は漢詩に、次のように詠みました。

留连戏蝶时时舞, 自在娇莺恰恰啼。

ウグイスの声を中国の古文では“恰恰”と表現します。日本語では「法華経」と聞きなします。

「ホー、ホケキョ。ホー、ホケキョ。ホー、ホケキョ。」

日本には昔から仏教の信者がたくさんいます。そこで、鳥の聞きなしでも仏教関係の事物が多いのです。

コノハズク、という鳥の聞きなしは「仏法僧」です。仏法僧は、仏教のいわゆる「三宝」です。

「ブッポーソー、ブッポーソー、ブッポーソー」

18世紀、江戸時代の怪奇小説集『雨月物語』に収録されている幽霊の話「仏法僧」では、コノハズクの聞きなしは「ぶっばん、ぶっばん(仏法、仏法)」となっていて、幽霊があらわれる夜の山の不気味さを効果的に描写しています。

サンバの声も、日本ではよく聞きます。

「キッス、ミー。キッス、ミー。キッス、ミー。」

サンバの聞きなしは、なんと英語です。“Kiss me!”つまり、私にキスをして、という意味です。ユーモラスですね。

この他にも聞きなしは、たくさんあります。

ヒバリの聞きなしは「利取る、利取る、日一分」。意味は「利子を取る。利子を取る。一日あたり10パーセント。利子を取る。利子を取る。一日あたり10パーセント・・・」。

コジユケイの聞きなしは「ちょっと来い、ちょっと来い、・・・」。意味は「ちょっとこちらに来なさい。ちょっとこちらに来なさい」。

ホオジロの聞きなしは「一筆啓上仕り候。」。意味は「これからこの手紙で簡単に申し上げます」。

ツバメの聞きなしは「土食って、虫食って、口渋い。土食って、虫食って、口渋い。・・・」。意味は「私は巣を作るために泥を口で食べる。また栄養補給のために虫を食べる。その結果、口の中が渋くなった」。

聞きなしの中には、「なるほど、いかにも鳥らしい」と思うものもあれば、「なんで鳥がこんな内容を喋るの?」とナンセンスさに思わず笑ってしまうユーモラスな聞きなしもあります。

日本は緑が豊かな国です。山の中や農村部はもちろん、町のなかでもよく野鳥のさえずりが聞こえます。

日本に来られる機会があれば、ぜひ鳥の鳴く声にも耳を傾けてみてください。

「加藤先生の開講コーナー!」はNHK国際放送のラジオ番組『波短情長』のコーナーです。明治大学の加藤徹教授が、日本の文化について楽しく解説します。あなたの知りたい日本の文化や風習は何ですか?メッセージもお待ちしています。

